

1. It was widely assumed in Europe in medieval times that the earth was flat and was the center of the universe.

《語句》 medieval times:中世

【解答&解説】

この英文ですが、widely という副詞、in Europe in medieval times という前置詞句を(これらは文の主要素にはならないので)、()でくくります。ちなみにこれらは働きとしては was assumed を修飾する副詞(句)です。

すると It was assumed that S+V~ という仮主語構文が浮かび上がってきますね。

It was (widely) assumed (in Europe in medieval times)

[仮・主] _____ ↑ ↑ _____ ↑ _____

<p style="text-align: center;">that the earth was flat and was the center of the universe</p> <p style="text-align: center;">(接) S V₁ C V₂ C ↑ _____</p>
--

[真・主]

文の構造をとるだけの解説ならここまでかもしれませんが、LESSON BOOK REVIEW Rule-25 3. にこんなルールが載っています。

「It is+p.p.+that S+V~」という仮主語構文の意味はたいてい以下の3種類であることが多い。

- ① 「~だと言われている・報じられている」
- ② 「~だと思われる[ている]・みなされる[ている]」
- ③ 「~だと示される[ている]」

本問は②、つまり「~だとみなされていた」とまとめれば assumed の意味が不明でも、「地球は平らで、宇宙の中心であると、中世のヨーロッパにおいて広くみなされて[考えられて]いた」と、和訳が完成してしまうのですネ。

2. Jane was so naive, so conscious of herself in relation to other people, that it had never occurred to her that others could gossip about her behind her back.

《語句》 naive:世間知らずな

(be) conscious of A:Aを意識している

in relation to A:Aに関して、Aとの関係において

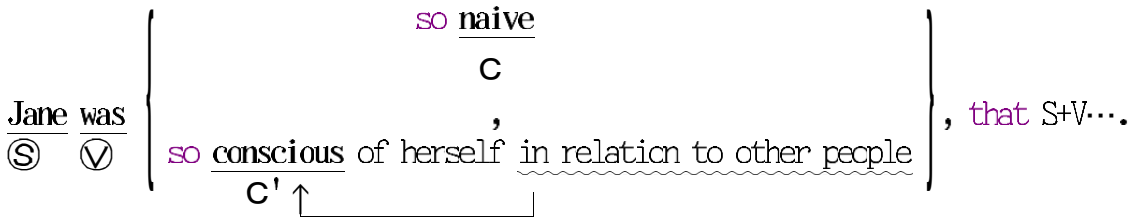
it occur to A(人) that S+V~:~がAの頭に浮かぶ

gossip about A:Aについて噂話をする

behind one's back:~のいないところで ⇔ to one's face:面と向かって

【解答&解説】

まず全体が「とても~なので…する」という、いわゆる so~that構文でできていたのがわかりましたか? そうすると people までの前半部は、「ジェーンはとても世間知らずで、他人との関係において自分のことをとても意識していた[自己の内面への意識が過剰だった]ので」となります。



続いてthat節内の文構造ですが、it は仮主語で、that people~ her back までが真主語です。そうするとこのような訳になります。「人々が、彼女のいないところで彼女について話し合っているということが、彼女の頭に浮かぶことは決してなかった」。

全体をまとめるとこんなふうになります。

「ジェーンはとても世間知らずで、他人との関係において自分のことをとても意識していた[自己の内面への意識が過剰だった]ので、人々が、彼女のいないところで彼女について噂話をしているかもしれないということが、彼女の頭に浮かぶことは決してなかった」

余談ですが、naive(ナイーヴ)と言うと、「無邪気な」「天真爛漫な」というgood型の形容詞としての意味をすぐに日本人は頭に浮かべがちですが、意外に英語では「単純な」「だまされやすい」「世間知らずの」といった、bad型の形容詞として用いられることが多いという点をおさえておきましょう。

(ex) It's naive of you to believe that. それを信じるなんて君は単純だね

それから、occur は「起こる」という意味が基本ですが、A(物事) occur to B(人) で「AがBの頭に浮かぶ」という語法があります(受験では頻出)。

僉本問はこの occur の語法が仮主語構文として用いられていた。

これを(たとえ知らなくても)その意味を類推する方法が LESSON BOOK REVIEW 特別講義 に載っています。そこに「S+V to ~」型には「~に(まで)至る」という意味があることが書いてありました(65ページを参照)。A(物事) occur to B(人) も「Aという考えがB(の頭)にまで至る → AがBの頭に浮かぶ」ということなのです。

受験本番では、必ず知らない表現に出会うもの。そのような時に、それを類推する方法を知っているのと知らないのでは(結果に)雲泥の差が出ることは言うまでもありません。このような類推法を自在に使いこなせる受験生になれるよう、ルールの習得に励んでくださいネ。

3. The arrival of the clock must have brought about a great if gradual change in the social life of Europe.

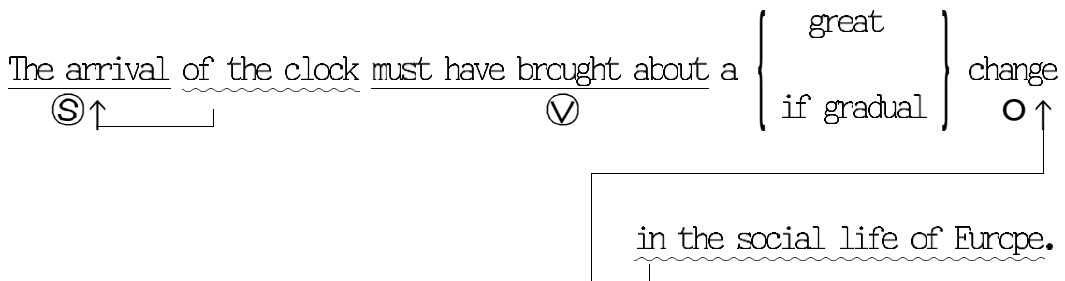
《語句》 arrival:出現、登場

bring about A:Aをもたらす、引き起こす

gradual:段階的な

【解答&解説】

まず全体構造はわかりましたか? The arrival がS(主語)、must have brought about がV(動詞)、a ~ change が目的語の第三文型(SVO)です。in ~ Europe は change を修飾しています(形容詞句)。



さてそれでは具体的な解釈ですが、まず arrival について。arrival を「登場」「出現」と訳すことがあります。覚えておきましょう。The arrival of the clock で「時計の出現」と訳すと良いでしょう。

bring about は「~をもたらす、ひきおこす」と訳せば良いですね。

must have+p.p.~は「~した[だった]に違いない」と訳します。

問題は great if gradual の部分です。この部分は change を修飾しているのですが「もし徐々にならば大きな」では意味不明ですね(〜;)。実は LESSON BOOK REVIEW Rule-51 には、うまく訳せないときに even を補ってあげるといい構文として if 節があるとあります。本問の if がまさにそれで、この if gradual は even if gradual、つまり「たとえ段階的な[ゆるやかな]ものではあるにしても」と訳すとよかったです。そうすると a great if gradual change の部分は「たとえ段階的ではあっても、大きな変化」となるわけです。great も change を修飾しています。こ

れについては LESSON BOOK REVIEW Rule67 にこうありますね。

冠詞・所有格と名詞の間に置かれた語句は、形容詞として直後の名詞を修飾する働きしかない。

冠詞(a・the) }
所有格 } + □ +名詞 ☞ □は100%、形容詞(の働きをする)。直後の名詞を修飾する。

このルールから、a と change の間にはさまれた great if gradual は、change を修飾しているとわかるのです。

問題文全体の訳はこんなふうになります。

「時計の出現は、ヨーロッパの社会生活に、たとえ段階的なものであっても大きな変化を引き起こしたに違いない」

4. I never understand what kinds of people have bought, I will not venture to say read, such books.

《語句》 venture to do[願形]～:あえて～する

④ venture to do[願形]～の意味の類推法については《課外授業7》を参照せよ。

【解答&解説】

まず全体構造ですが、S(主語)は I、V(動詞)は understand、what～books がO(目的語)の第三文型(SVO)です。

I never understand
⑤ ④

what kinds of people have bought, I will not venture to say read, such books

O

難しいのは what節内の意味と構造ですね。

ここはまず(2つのカンマによってはさまれた)I will not venture to say read を挿入語句だと判断して()でくくってしまえばよかったです。すると bought の目的語が the book で、what節内もSVOだったとわかります。

what kinds of people have bought (, I will not venture to say read,) such books.
S V S V O

ちなみに read は、本来 what kinds of people have read the book とすべきところを、繰り返しを避けてこのように(read一語で)表現されていると見るといいでしょう。

④ LESSON BOOK REVIEW Rule-49 を参照せよ。

⇒ I will not venture to say what kinds of people have read such books

どんな種類の人間がそのような本を読んだのだろうとあえて言うつもりはない

そうすると問題文全体の訳はこんな感じになります。

「一体どんな(種類の)人間がそのような本を今までに買った — 読んだとはあえて言うつもりはないが — のか私にはまったくわからないのだ」

挿入節[語句]の和訳の仕方ですが、上の模範訳のように、和訳でも挿入節[語句]として、ダッシュ(—)などでくくって(挿入的に)訳してかまいません。

5. Once we realize that life is difficult — once we truly understand and accept it — then life is no longer difficult, for once we do so, the reality that life is difficult doesn't matter any longer.

《語句》 not ~ any longer: もはや~ない
= no longer

【解答&解説】

本問は、おなじみの品詞の意外な意味と用法がポイントです。まず文頭から2行目の difficult までを解説しましょう。

皆さんは「一回」「かつて」等と訳す once は知っているはずですが。その場合、品詞としては、名詞または副詞になります。

1. 副詞の once。

① 一回、一度

(ex) I've been there once. そこへ1度行ったことがある

② かつて

(ex) He once lived in Paris. 彼は以前パリに住んでいた

① 1. この意味では主に肯定文で過去の動詞と共に用いる。疑問文・条件文での「かつて」の意味は ever で表す。

(ex) Have you ever seen a panda? パンダを見たことがありますか

2. この意味では be 動詞を除いて普通、動詞の前または文頭に置かれる。

動詞よりあとに置かれると「1度」「1回」の意になることが多い。

(ex) I saw it once. 私はそれを1度見たことがある

③ 《イディオム》

(1) more than once: 一度だけでなく、何回も

(2) once again: もう一度

(3) once or twice: 二、三度(a few times)

何回か = once and again

(4) once (and) for all: (これを最後に)きっぱりと

(ex) He gave up his attempt once for all.

彼はきっぱりとその企てをあきらめた

(5)once in a while:ときどき

2.名詞の once。

①一回、一度

(ex) Once is enough for me. 私には1度で十分だ

②《イディオム》

(1) at once:(a)すぐに=soon

=right away

(b)一斉に、同時に

(ex) Don't everybody talk at once! みんな一度に話すな

(2) all at once:突然、だしぬけに =suddenly

=all of a sudden

(3) for once:今度だけは

(ex) Please forgive me for once. 今度だけは見のがしてください

ところがこれ以外に「接続詞」の once があるのです。意味は「一度(ひとたび)~すると」「一旦~すると」という条件を表します。

(ex) My husband never wakes before six o'clock, once he gets to sleep.

夫はいったん眠りについてしまったら6時前には決して目を覚まさない

Once you have made a promise, you must keep it.

一度約束したからにはそれを守らねばならない

接続詞の once を見極めるポイントは、その(接続詞)の場合、以下のような形で(つまり2つのS+Vをつなぐ接着剤として)使われる点です。

① Once S+V~, S+V....

② S+V~, once S+V....

さて本問でも once は接続詞として使われていました。ダッシュ(一)によって挿入された部分を()でくくると、once の結んでいる2つのS+Vが見えてきます。

Once we realize that life is difficult , then life is no longer difficult .
(接) S V O ⑤ ⑥ C

つまり then~difficult までがこの英文の主節だったわけです(then は「ならば、その場合」という意味の副詞)。

ダッシュによって挿入された once~it は、直前の once節を同格的に言い換えていると見ると良いでしょう(もちろんこの once も接続詞の once)。

LESSON BOOK REVIEW Rule-61 を参照せよ。

節内の it は that life is difficult を指しています。

ここまでわかれると、ここまでの英文の意味はもう難しくありませんね。こんな訳になります。

「ひとたび人生は難しいということを悟ると — (すなわち) ひとたびそれを真に理解し受け入れると — そうすれば人生はもう難しくはない」

さて次は、for から最後までです。この部分の分析図をまず表してみましょ。

, for once we do so,
 (接) (接) S V O

the reality [that life is difficult] doesn't matter any longer.
 (S) ↑ (接) S V C (V) ↑

that は reality を修飾する(同格の)接続詞です。「～という」と訳します(これについては後で詳しく説明します)。

実は once 以外にこの英文ではあと2つ、おなじみの単語が意外な品詞として用いられていました。まずは for。for は(特に文中盤で、for という形で)接続詞として使われることがあります。意味は「**というのは～だからだ**」で、「理由」を表します。後ろに**S+V**を取るのが**特徴**で、本問でも the reality ~ matter というS+Vを後ろに取ってました(once we do so は挿入された副詞節と見ると良いでしょう)。

そしてもう1つの意外な語が matter です。この matter はおなじみの「問題」「重要性」「事柄、事態」「物質」といった意味の名詞ではなく、「**問題だ**」「**重要だ**」という動詞として用いられていました。これらが文構造を分かりにくくしていたわけです。動詞の matter の特徴は以下の通りです。

- ①自動詞である。
- ②通例 it や what などを主語にとることが多い。
- ③疑問・否定・条件文で用いることが多い。
- ④count, be important, make difference などと言い換えられる。

動詞の matter を用いた例文をいくつかあげておきましょう。

(ex) It doesn't matter to me where she is from.

彼女がどこの出身なのかは私にはどうでもいい

=It makes no difference to me where she is from.

It matters little if they are late.

彼らが遅れても大したことにならない

What matters most is whether you do it or not.

重要なことは君がそれをするかどうかだ

最後に後半部の日本語訳です。

「というのは、ひとたび そうすれば(=人生は難しいということを知ってしまったら)、人生は難しいという現実はもはや問題ではないからだ」

上の訳でも分かるように do so は realize that life is difficult の繰り返しを避ける代用表現です(このような do を「代動詞の do」と言う)。

さて最後に「同格の that」について説明しておきましょう。

①「同格」の that とは。

名詞 + that S + V ~

という形で、直前の名詞の内容を具体的に説明し直すthat節がある。このような節を導く that のことを、(内容に同じことを言っているから)「同格」の that という。訳し方は「～というA(名詞)」。この that は、品詞としては「接続詞」である。したがって直後には「完全な文」が続く(関係代名詞の that の直後には「不完全な文」が続く)。

(ex) He heard the news that his team had won.

名詞 ↑

彼は彼のチームが勝ったという知らせを聞いた

The suggestion was made that English teaching should be improved.

名詞 ↑

英語教育を改善すべきだという提案が出された

☞上例のように、名詞とthat節が離ればなれになる場合もある。

②that節を同格節としてとれる名詞は、以下の2種類。

1. 「思考・感情」「認識」「発言」を表す名詞。☞要するに「言う」「思う」「知る(わかる)」から派生した名詞。

(ex) thought「考え」 feeling「感情」 notion「意見・考え」 remark「意見」
belief「信念」 impression「印象」 argument「主張」 order「命令」
knowledge「知識」 idea「考え」 realization「自覚」 notice「通告」

2. 「事実(真実・証拠など)」「情報(報告・うわさなど)」「機会・可能性」「命令(要求・提案など)要求」などを表す名詞。

(ex) fact「事実」 news「知らせ」 proof「証拠」 rumor「うわさ」
chance「チャンス」 possibility「可能性」 evidence「証拠」

実際、文中で「思考・感情」「認識」「発言」「事実(真実・証拠など)」「情報(報告・うわさなど)」「機会・可能性」を表す名詞の(直)後にthat節を発見したら、まず「同格のthat」であることがほとんど。ただし、最終的な確認は、that直後に「完全な文」がきているかどうか(「不完全な文」がきていればそのthatは関係代名詞になる)で判断する。

本問では、the reality という「事実」系の名詞の後にthatがあり、that節内も完全な文であった点から、このthatを「同格のthat」と判断したわけです。

関係詞節内の have to は要注意!

なぜ関係詞節内の have to は要注意かというと、have to と言えばおなじみの「～しなければならない」という意味にならないことが(関係詞節内の have to については)あるからです。以下の例文を見てください。

The government should listen to what the victims of an earthquake have to say.

この英文の what 節内を「地震の被災者が言わなければならないこと」と訳したのでは減点です。ここは「地震の被災者の言葉[言い分]」と訳さなければなりません。なぜなら、what 節は元々、

The victims of an earthquake have something to say.

の something が what となって節頭に飛び出したわけで、have は「持っている」という意味の have なのです(to say は something を修飾する形容詞句。something to say は「言うべきこと → 言い分、話」となる)。ですから関係詞節内の have to には2種類があるということになります。

- ① 「～しなければならない」というおなじみの have to.
- ② have something to say から生じた have to.

見極め方法は「(客観的状况により仕方なく)～しなければならない」という訳をして不自然な場合、②タイプと判断したらいいでしょう。

會要するに文脈で判断するということ。

ただ what ~ have to say 型の多くは②タイプとっておくといいでしょう。②タイプの例をいくつか挙げておきますネ。

(ex) The king sentenced him to death without listening to anything he had to say.

王は彼の言い分を一切聞くことなく、彼に死罪を言い渡した

《語句》 sentence A(人) to B(刑): AをBに宣告する

I think what the critic has to say about the present political condition is worth listening to.

現在の政治状況についてのその評論家の発言は耳を傾ける価値があると思う

《語句》

critic:評論家

political condition:政治状況

A is worth doing~:Aは~する価値がある

6. A book written by an unknown writer was the cause of the early, enormous success of this revolution.

《語句》 cause:原因
revolution:革命

【解答&解説】

まず全体の骨組みは A book がS(主語)、was がV(動詞)、そして the cause がC(補語)の第二文型(SVC)です。「by以下によって書かれた一冊の本が、of以下の原因(cause)だった」となります。

A book written by an unknown writer was the cause of ~ revolution.
⑤↑□ p.p. ⑤ V C ↑□

実際ここまでは問題ないはず。しかしややこしいのは

the cause of the early, enormous success of this revolution

です。この部分、「A of B」の構造になっています。「A of B」は、中学校以来「BのA」と訳してきたはずですが、「the legs of the table:テーブルの脚」のように、ただここをそのような要領で訳すとなんともさまにならない訳になってしまいます(「この革命の初期の大きな成功の原因」みたいな…「の」が多過ぎ(-"-;A)。ではどうするか。簡単にそのルールを教えてあげましょう。実は(「BのA」ではうまく訳せない)「A of B」にはこんなルールがあるのです。

①主格の of。

「A of B」の「A」を自動詞化・形容詞化できるものこと。その場合には「B」をその主語にして、「S+V」の形で書き換えてみるといい。

△形容詞化できる場合は、be動詞を補って「S+V」の形に変えてみる。

(ex) the existence of ghosts ⇒ Ghosts exist.
S V 幽霊が存在する

the popularity of the movie ⇒ the movie is[was] popular.
S V その映画は人気がある[あった]

②目的格の of。

「A of B」の「A」を他動詞化できるもののこと。その場合には「B」をその目的語にして、「他動詞+目的語」の形で書き換えてみるといい。

(ex) the education of children ⇒ educate children
V O 子供を教育する

the discovery of the island ⇒ discover[ed] the island
V O その島を発見する[した]

③同格の of。

これは後ろのB(又はdoing～)が、前のAの内容を説明する(言い換える)もので、「A of B/doing～」が「A=B」「A=doing～」の意味関係になるのが特徴。

◎「A=抽象」「B=具体」の(イコール)関係になる。

B/doing～の後に「という」を付け足し、「B(～する)というA」と訳すとい

(ex) the news of the team's victory チーム勝利という知らせ

his habit of smoking 喫煙という彼の習慣

上の例のように「A of doing～」という形に文中で出会ったら、「～するというA」型の同格と見なしていいことが多い。

④その他。

1. 「A of+抽象名詞」型。

「『of+抽象名詞』は形容詞化する」というルールがある。たとえば of importance は、形容詞の important と同じ。したがって

a man of importance

は an important man、つまり「重要な人」という意味になる。

(ex) a machine of great use とても役に立つ機械

=a very useful machine

a man of sense 分別のある人

=a sensible man

a man of courage 勇気のある人

=a courageous man

of no use 役に立たない

=useless

of some use いくらか役に立つ

= a little useful

📖上例のように、この形で用いられる抽象名詞の前には no, little, great, much等の形容詞が付くことが多い。

2. 「BについてのA」。

(ex) knowledge of the current situation 現在の状況についての知識(認識)

understanding[comprehension] of world economy 世界経済についての理解

3. 「Bのうち(中)のA」。

(ex) three of the girls 少女たちのうちの3人

4. 「(a/the)+名詞+of」で一つの形容詞の働きをするもの。

(ex) a lot of A 多くのA

a variety of A 様々なA

a wide range of A 広範囲なA

📖LESSON BOOK REVIEW P76 を参照せよ。

そこで success of this revolution ですが、success は、succeed と自動詞化できるので(ここは「主格の of」と判断し) this revolution を主語にして以下のように書き換えてみます。

⇒ This revolution succeeded. この革命は成功した

後は early と enormous を、(動詞化した)succeed に副詞的にかけて全体の訳をまとめます。

⇒ This revolution succeeded early enormously.
S V ↑

すると「この革命が初期において大成功した」となります。

次に the cause of the ~ revolution の部分ですが、今度は cause は(スペルは同じで)「~を引き起こす」という意味の他動詞化できます。したがって(ここは「目的格の of」と判断し)この部分全体を「他動詞+目的語」の形で書き換えてみます。

⇒ caused the early, enormous success of this revolution
V O

この革命が初期において大成功する結果[事態]を引き起こした

で、「引き起こした原因 = A book」なのですから全体は以下のように意識できることとなります。

「無名の作家によって書かれた一冊の本が、この革命が最初から大成功する結果を引き起こした[もたらした]」

會後半部を「この革命が最初から大成功する原因となった」と訳してももちろんかまわない。

「無名の作家によって書かれた一冊の本が原因となって、(結果として)この革命は最初から大成功をおさめた」

7. The rise of men of science to great eminence in Japan is a modern phenomenon.

《語句》 eminence: 名声、(地位が)高いこと
phenomenon: 現象

【解答&解説】

この英文の構造は The rise がS(主語)、is がV(動詞)、a modern phenomenon がC(補語)の、第二文型(SVC)です。

The rise ~ is a modern phenomenon.
⑤ ⑥ ⑦

そしてThe rise of men の of は「主格の of」です。つまり

⇒ Men of science rise to great eminence in Japan.
S ↑ V ↑

と、men of science を「S」、rise を「V」として、「S+V」の形で書き換えてしまえばいいのです。

「of science」ですが、これは「『of+抽象名詞』は形容詞化する」というルールにあてはまります。つまり「of science = scientific」です。ということは、

men of science = scientific men

となり、「科学に携わる人々 → 科学者」という意味になります。すると最終的にこのように書き換えることができます。

→ Scientific men rise to great eminence in Japan.
⑧ ⑨

日本では、科学者は非常に高い地位へと昇りつめる

愈 rise to も「S+V to ~」型。「~に(まで)至る」で訳せてしまう。

これに残りの語句を足して、全体はこんなふうになります。

「日本では科学者は非常に高い地位へと昇りつめるというのは、現代的な現象である」

8. Working as a diplomat, Mr. Yamada found himself posted to countries he would otherwise hardly have been able to visit.

《語句》 diplomat:外交官

post A to B: AをBに配属させる

area:地域

hardly:(ほとんど〜ない

=scarcely

【解答&解説】

まずこの英文の全体の構造ですが、

Doing~, S+V...

という形ですね。

Working~, Mr. Yamada found...

㊟

㊿

このような構造は、分詞構文の特徴です。

㊟LESSON BOOK REVIEW Rule-58 を参照せよ。

分詞構文の分詞句部分は、それが文頭(や文中盤)にある場合、

①「時(〜の時、〜すると)」

③「条件(もし〜)」

②「理由(〜ので)」

④「譲歩(〜けれど、〜としても)」

のいずれかで訳せることが多いんです。

本問の分詞句(Working as a diplomat)は「外交官として働いていた時[頃]」とまとめるのが自然な流れでしょう。ちなみに、直後に「名詞」を取る as は前置詞で、基本的に「〜として(の・は)」と訳します。

㊟LESSON BOOK REVIEW P85 を参照せよ。

主節部分は「find O C:OはCだと思う、わかる」という構文でできていますね。

himself がO、posted がCです。find O C構文の隠れた特徴は、find は和訳に出さない方がいいことが多いということです。本問も「自分が〜に配属されるのがわかった[気付いた]」ではなんともピンボケの訳になってしまいます。「〜に配属された」で十分なのです。

次に後半の以下の部分。

countries he would otherwise hardly have been able to visit

ここが「名詞 S+V～」の構造であることはわかりますね。

countries he would otherwise scarcely have been able to visit
名詞 S V

これは countries と he の間に関係代名詞(の目的格)が省かれているのです。そんな「名詞 S+V～」の特徴は、後ろの S+V～部分を、前の名詞にかけて(修飾させて)訳せばいいんですね。

☞LESSON BOOK REVIEW Rule-52 を参照せよ。

ただ問題は he would～visit までの訳出です。この部分がうまくつかめなかった人。こんな考え方を持っておくといいでしょう。

英文中において、if節は見当たらないないが

- ①現在の内容を述べている中に、突然「助動詞の過去形+V[原形]～」が現れた
- ②過去の内容を述べている中に、突然「助動詞の過去形+ have+p.p.～」が現れた

ら、仮定法ではと判断し、if節にあたる内容が、文中のどこかにもぐり込んでいると考えてみる。そして、if節の代用をしていると思われる語句を見つけたら、それを和訳の際には if節のように訳出するといい訳になる。

☞LESSON BOOK REVIEW P52 Rule—14 を参照せよ。

本問も would ～ have been から、これが仮定法(過去完了)であることを読み取らなければいけません。そして otherwise が条件節の代わりをしていることに気づき、「そうで(も)なければ、訪れることなどまず(ほとんど)できなかつたであろう国々」とまとめるのです。そうすると全体はこのような訳になります。

「山田さんは外交官として働いていたとき、そうで(も)なければ訪れることなどまず(ほとんど)できなかつたであろう国々に配属された」

最後に posted to の類推法を紹介しましょう。この(過去分詞の) posted to は、post A to B の受け身であることがまず見て取れるようになりましょう。つまり「動詞+ A to B」型だったのです。「動詞+ A to B」型の意味は LESSON BOOK REVIEW Rule-26 7. に以下の3つになるとありますね。

- ①「AをBに与える(伝える、加える)」「AはBのせいだと考える」
- ②「AをBに連れてゆく(くる)、もたらす」「AをBに合わせる」
- ③「AをB(状態・性質)に変える(にする)」

しかもこのうち「与える」型が一番多い(約60%)。「もたらす」型が約30%)とあります。つまり「動詞+ A to B」型は十中八九、「AをBに与える / もたらす」なのです。そこで post A to B を「AをBにもたらす」と読み取れば、本問ではその受け身なので、「～であろう国々に(自分が)もたらされる → 赴任[配属]させられる」とこの部分を解釈できてしまったのです。

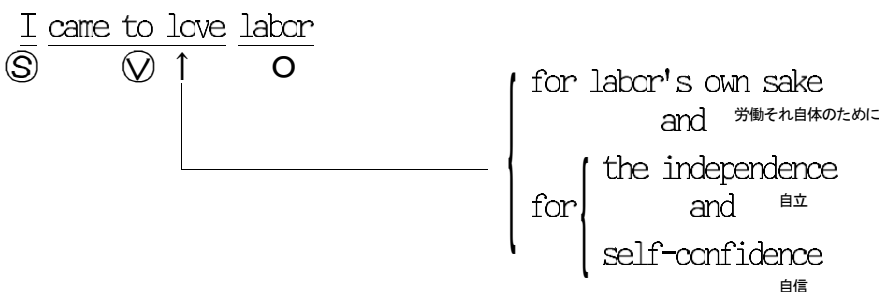
9. I came to love labor for labor's own sake and for the independence and self-confidence which the ability to do something which the world wants done gives to me.

《語句》 come to do[願]~: ~するようになる
 =get to do[願]~
 labor:労働
 for one's own sake:~のために
 會「目的」を表す。
 independence:自立、独立
 self-confidence:自信

【解答&解説】

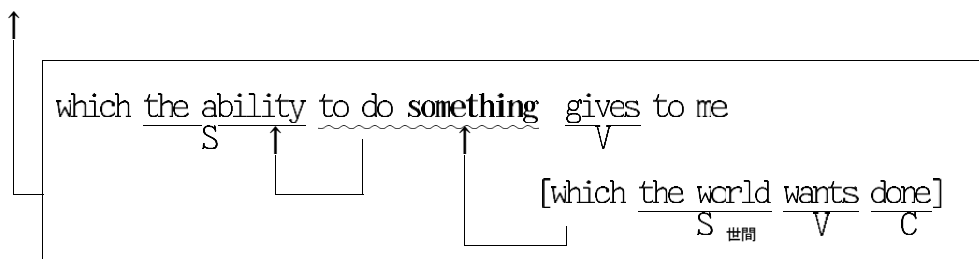
この英文のS(主語)は I、V(動詞)は came to love と見ればいいでしょう。そして labor がO。骨組みは第三文型(SVO)と見るのが一番わかりやすいでしょう。訳は「私は労働を愛するようになった」となります。

その後、2つの forが導く前置詞句が and によって結ばれ、共に to love を修飾しています。それぞれ「~のために」という意味です。



このあと2つの which節があります。それぞれの先行詞が何かわかれば、構造をつかむことができたはずですが、1つ目の which節(which ~ gives to me)の先行詞は the independence and self-reliance。2つ目の which節(which ~ done)の先行詞は something です。つまり2つ目の which節は「関係詞節内の関係詞節」だったのです。以下がその構造になります。

independence
and
self-confidence



☞want O Cで「OにCしてほしい」。

上のように(1つ目の)which節内のS(主語)はthe ability。V(動詞)は gives。元々 gives の後ろにあった目的語が which となって節の頭に飛び出したのです。to do something は ability を修飾する形容詞句。そうすると「to do~以下のことができる能力が私に与えてくれる(自立と自信)」と訳せます。

to do something which the world want done の部分ですが、上の図を見てわかるように which ~ done は、something を先行詞にとっています。この(2つ目の)which節内のS(主語)は the world、V(動詞)は wants。

☞the world は「世界」「世間、世の中」2つの意味があるが、本問では後者、つまり「世間、世の中」と訳した方が自然だろう。

この wants は、元々「want O C[p.p.]:Oが~されるのを望む」という構文。そのOが which になって節頭に移動した結果、wants の直後にC[p.p.]がくっついた構造になったのです。

そうすると something ~ done までは「世の中[世間]がやってほしいと望むことをやれる(能力)」となります。この部分を1つ目の which節につなげると「世の中[世間]がやってほしいと望むことをやれる能力が私に与えてくれる(自立と自信)」となります。

最後に全体をつなげるとこうなります。

「私は、労働を労働それ自体のために、また世間がやって欲しいと望むことを(自らが)できる能力が私に与えてくれる自立と自信のために、労働を愛するようになった」

10. These days we live in a cleaner environment, and are not so exposed to bacteria when young, so our immune systems are not as strong.

《語句》 A is exposed to B: AはBにさらされている

會能動態では expose A to B で「AをBにさらす」。

bacteria:バクテリア

immune system:免疫系

【解答&解説】

まず冒頭から when young までですが、文頭の These days は「今日では、近頃は」という副詞(したがってこれは文の主要素ではない)。

會「時」「方法」「方向」「場所」「距離」「程度(頻度)」などを表す名詞については、文中での働きは「副詞」と同じであることが多い。LESSON BOOK REVIEW Rule-1 1.を参照せよ。

we がS(主語)、live と are が and によって並列され、共に(we を主語とする)V(動詞)になっているのは問題ないでしょう。

$$\begin{array}{l} \text{we} \left\{ \begin{array}{l} \text{live in a cleaner environment,} \\ \text{⑤} \quad \text{and} \\ \text{are not so exposed to bacteria when young} \\ \text{⑥} \end{array} \right. \end{array}$$

when young というのは when we are young の we are(主語+be動詞)の省略です。

會LESSON BOOK REVIEW Rule-53 を参照せよ。

それから本問は前半部で比較級(cleaner)、後半部で原級比較(as strong)がそれぞれ使われていますが、本来比較級、原級比較にあるべき than...、(as~)as... がありません。一体なぜでしょうか。実はこんなルールがあるのです。

原級比較や比較級において than 以下、(so[as] ~as の後半の)as 以下が省かれてしまっていることがある。理由は、(それについては既に述べられていたり、また社会的常識であるという理由で)分かりきっているからの

だが、和訳の際には、その省かれている *than* 以下、*as* 以下がなんなのかを意識して訳すことが大切。

④ LESSON BOOK REVIEW P49 Rule—13 を参照せよ。

本問は「今」を「昔[以前]」と比較して語っていることはあまりに明らかなので「昔より、昔ほど」が省かれていると見るのです。そうすると前半部はこのような訳になります。

「今日では私たちは(昔より)清潔な世界に住んでおり、若い頃にバクテリアにそれほどさらされることがない」。

さて後半部ですが、*so* から始まっていますね。前半部にも *so* がありましたが、両者の意味は異なります。最初の *so* は「それほど」。2番目の *so* は「それ故」「その結果」と訳します。

その訳し分け方ですが、*so* の直後に「形容詞」「副詞」がきたら「とても、非常に」と訳すのです。

④ *exposed* は過去分詞で、「形容詞」の仲間と見る。

ただ本問のような否定文では「それほど、そんなに」となります。例文をいくつか挙げてみましょう。

- (ex) She's so lovely. 彼女はとても愛らしい
Don't be so angry. そんなに怒るな
Don't run so fast. そんなに速く走るな
He didn't go so far. 彼はそれほど遠くへは行かなかった

そして *so* の後ろに「S+V」がきていたら「それ故」「その結果」と訳すのです。

④ 確かに後半の *so* の後ろにはS+Vがある。

これも例文をいくつかあげてみましょう。

- (ex) It was too dark to go on, so we stayed at the hotel.
先に進むにはあまりに暗かったので我々はそのホテルに宿泊した
He got quite excited, so he didn't feel sleepy at all.
彼はすっかり興奮したので少しも眠いと感じなかった
I'm going that way myself, so I'll show you.
私もそちらの方へ参りますからご案内しましょう
We checked carefully, so that the mistakes were caught.
私達は慎重にしらべた。その結果間違いが見つかった

ただし場合によっては「so that S will[can / may] V～:Sが～するために(できるように)」という構文の that が省略されて so S will[can / may] V～ となることがあります。その場合は「目的」として訳さなくてはなりません。これも例文をあげておきましょう。

(ex) Make haste so you won't miss the train.

列車に遅れないように急ぎなさい

Check carefully so any mistakes will be caught.

どんな間違いも見逃さないように調べてください

さてそうすると後半部はこのような訳になります。

「それ故、私たちの免疫系は以前ほど[昔より]強くないのだ」。

前半部は「以前ほど[昔より]」をあえて和訳に出さなくても大丈夫でしたが、後半部は「以前ほど[昔より]」という訳を付け足して日本語にしないと良い訳になりませんね。このように省略された than…、as… を和訳に出すか出さないかは状況・文脈によって判断します。

最後に so について、もう少し詳しく(イディオムなども含めて)まとめておきます。

①so の直後に「形容詞」「副詞」がきたら「とても、非常に」と訳す。

⚠ただ否定文では「それほど、そんなに」となる。

②so の後ろに「S+V」がきていたら「それ故」「その結果」と訳す。

⚠文頭で用いられ「それでは、してみると」という意味になることもある。

③ただし場合によっては「so that S will[can / may] V～:Sが～するために(できるように)」という構文の that が省略されて

so S will[can / may] V～

となることがある。その場合は「目的」として訳さなくてはならない。

④代用語の so。

1.[前述の節や文の代用]

(ex) A: Is she right? 彼女の言うことは正しいでしょうか

B: I think so. そう思います

= I think she is right.

I told you so. だからそう言ったじゃないか

2.[前述の補語の代用] ☞これは品詞的には形容詞になる。

(ex) A:Is she ill? 彼女は病気ですか

B:Very much so. 重病です

= Yes, she is very ill.

Mary is faithful to her husband and will remain so for ever.

メアリーは夫に貞淑だし今後もずっとそうであろう

☞so は、前述の補語である faithful の代用。

3.[相手に言い返して]「実際」

(ex) A:You aren't telling the truth. 本当のこと言ってないじゃないか

B:I am so. 言ってるよ

4.[補語として]「(状況などについて) そのとおりで」 ☞これも品詞的には

(ex) Is that so? そうなんですか

形容詞になる。

It cannot be so. そうであるはずがない

5.[肯定文の後ろで「So+V+S」 という形で]「Sもまた〜だ」

(ex) Jeff likes golf and so does Ben.

ジェフはゴルフが好きだしベンもそうだ

=Jeff likes golf and Ben likes golf, too.

A:She can speak English. 彼女は英語が話せる

B:So can I. 私もだ

⑤その他の so を用いたイディオム。

1.and so on[forth] : 「(そして) …など」

(ex) She sells old furniture, secondhand clothes, and so forth.

彼女は古物の家具や古着などを売っている

2.if so: 「もしそうなら、もしそうだとしたら」

(ex) If so, nobody will help her. もしそうなら、誰も彼女に手を貸さないだろう

3. not so much A as B: 「AというよりもむしろB」

= not A so much as B

(ex) He is not so much a teacher as a scholar. 彼は教師というよりもむしろ学者だ

4.or so: 「…くらい」

會数詞の後で用いる

(ex) I waited for an hour or so. 1時間かそこらの間私は待った

5.so as to do[願]~: 「～するように(ために)」

=in order to do[願]~

(ex) She came nearer so as to hear better.

彼女はもっとよく聞こえるように近づいてきた

She went in quietly so as not to wake anybody.

彼女は誰も起こさないようにそっと入った

6.so ~ as to do[願]...: 「…するほど~で」 「…するように~」

=~ enough to do[願]...

(ex) She is not so foolish as to leave her car unlocked.

彼女は車にロックをしないでおくほどばかではない

He was so kind as to accompany me to the station.

彼は親切にも駅まで私に同行してくれた

The police so inquired into the case as to leave no stone unturned.

警察はあらゆる手だてを尽くしてその事件を捜査した

7.even so: 「たとえそうだとしたても」

(ex) He has a lot of faults; even so, he is liked by everybody.

彼には欠点が多いが、それでも皆から好かれている

《課外授業6》

that which。

受験でよく出る構文として、that which という形で、指示代名詞の that が関係代名詞の which の先行詞になるパターンがあります。

この that which は、「こと・もの」と訳し、関係代名詞の what で言い換えられます。

(ex) That which we need most is the president's forceful leadership.

我々がもっとも必要としているのは大統領の強力な指導力だ

上の英文は That が㊸、is が㊹、the ~ leadership がC。which~most は That を修飾しています。

That [which we need most] is the president's forceful leadership.
㊸↑ S V ㊹ C

ですが、実際 That which we need most は What we need most と同じで「我々が最も必要としていること[もの]」と訳せばいいのです。

㊸that which のイコール表現に、thing(s) which[that], that that, something which[that] などがある。

この that which について注意したいのは、There is 構文の中で用いられた場合です。その場合、that と which が離ればなれになることがあるのです。下の英文を見てください。

(ex) There is that about him which makes us have respect for him.

彼には、人に敬意の念を抱かせるなにかがある

which節は、離れたところにある前の(先行詞の) that を修飾しています。

There is that about him [which makes us have respect for him].
↑

このような英文にはご注意ください。